機動戦士ガンダムSEED DESTINY＋α

なみき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ＋α

【Ｎコード】
Ｎ１４１７Ｎ

【作者名】
なみき

【あらすじ】
オーブ連合首長国軍人の両親を持つコーディネーターのヒジリ・フェスターク。両親はナチュラル。ヒジリだけが遺伝子を調整された。彼はＣ．Ｅ．（コズミック・イラ）７１年６月１５日に起こったオノゴロ島の戦いで軍人の両親をなくす。自分はコーディネーターだということを偽り、オーブ軍に入ることにした。両親を殺した、地球軍を倒すために――――　＊初投稿＆初心者です。文のおかしいところがあるかもしれません。更新する速さは遅いです。すみません。

※この小説について

小説を読む前に目を通すだけでいいので読んでくれると嬉しいです。

・私は、初投稿&初心者です。
・文のおかしいところがあると思います。
・この小説は更新するのがとっても遅いです。（理由：忙しいから）
・1話1話が短いです。長く出来るように努力します。
・話の展開がものすごく早いと思います。ここも直していけるように努力します。

以上を理解のうえ読んでくれると嬉しいです。

＊キャラ紹介（とっても簡単な）＊

――オリジナルキャラ――

名前：ヒジリ・フェスターク　名前：レクナ・フレシー
性別：男　性別：男
年齢：１６歳　年齢：１６歳

名前：アリー・アットホ
性別：女
年齢：１７歳

――原作キャラ――

名前：エリカ・シモンズ
性別：女
年齢：不明（？）

名前：シン・アスカ
性別：男
年齢：１６歳

名前：キラ・ヤマト
性別：男
年齢：１８歳

プロローグ（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

プロローグ

俺の名前はヒジリ・フェスターク。コーディネーターだ。
俺の両親はナチュラルでオーブ連合首長国の軍人だった。階級はそれほど高くは無い。
俺は一人息子だからほとんど家にいるのは俺だけだ。

C．E．（コズミック・イラ）７１年６月１５日。
俺の両親は大西洋連邦とオーブ連合首長国によるオノゴロ島の戦いで戦死した。
両親が戦っているとき、俺はイージス艦の中に非難していた。
俺はだた一つ願っていたことがあった。両親が無事でいてくれと。
そのイージス艦の中に皆とは少し外れて座っている男の子がいた。
俺と同い年ぐらいの子だろう。
彼は目には大粒の涙を流したあとがあった。
手には女の子が持つようなピンクの携帯電話を持っている。
誰か好きな人がなくなってしまったのだろうか……それとも家族と一緒にいるはずだ。
しかし、家族の姿も見当たらない。
彼も俺の両親と同じように親は戦場にいるのだろうか。
俺は彼に話をかけた。

「始めまして。君……好きな人でもなくなったのかい？」

彼は俺の顔をしっかりと見て首を横に振る。俺は言葉を続ける。

「それじゃあ……家族の人はどうしたの？」

そんな言葉を聞いた後、彼は声を上げて泣き出した。

「あ！ごめん！！」

俺は謝る。しかし、彼は泣き続けた。
彼は家族をこの戦いで亡くしてしまったのだ。かわいそうに……
そうして数時間がたったとき、俺の親も亡くなったということを告げられた。

今はC．E．（コズミック・イラ）73年。
俺は今、オーブ連合首長国に戻りいつもと変わらない生活をしている。
このオーブ連合首長国はコーディネーターの俺を受け入れてくれている。
とっても安心して暮らせている。
そうして俺は、コーディネーターだということを偽りオーブ軍に入る。
両親を殺した、地球軍を倒すために――――

第一話　？　M1アストレイとの出会い（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

第一話　？　Ｍ１アストレイとの出会い

カガリ様がプラント最高評議会議長ギルバート・デュランダルさんと会っているとき、
俺は地下施設の有るオノゴロ島に来ていた。
この島の地下施設に無理やりでも入ってやろうと思ってきたのだ。
Ｍ１アトレイがぎっしり詰まっているところを見たかったから。
俺は地下施設に入るための出入り口を探す。その出入り口がなかなか見つからない。
俺は一人つぶやく。

「なんで……出入り口が無いんだろう……」

俺が疑問に思っていると、後ろから車の音が聞こえた。
「あっ車だ」と俺は思い道の端によった。
しかし、その車は俺を通り過ぎず俺の横で止まった。
車の窓が静かに開き、一人の女性が俺に話をかけてくる。

「あら。見かけない子ね。こんなところで何をしているの？」

その人は笑顔で聞いてきた。
髪はショートぐらいで髪の色は茶色だ。
モルゲンレーテ社がよく着ているオレンジ色の上着を着ている。
俺はその女性を驚きながら見ていると、

「車にのりなさい。」

と優しく言ってくれた。俺は軽くうなずき車に乗せてもらった。

「君、名前なんていうの？」

「えっ！俺ですか！？」

「そうよ。貴方以外に誰がいるの？」

「そうですよね……」

俺は少し戸惑っていた。

何しているのと聞かれ何も答えていないのに車に乗れといわれて……

俺はこのまま、殺されてしまうのか？なんでだろうか、そんな感じがするのだ。

俺は声を震わせながら自分の名前を言う。

「俺は……ヒジリ・フェスターク……です……」

女性はくすくす笑う。

「そう。ヒジリくんね。わかったわ。

私はエリカ・シモンズよ。宜しくね。」

「あっ！はい！宜しくお願いします！！」

俺の心臓の鼓動はだんだんとスピードを上げていく。

俺はこのままどこに連れて行かれるのかエリカさんに聞いてみた。

「エリカさん……俺をどこに連れて行くつもりですか？」

エリカさんは少しにやりと笑う。

「地下施設よ。あなた、Ｍ１アストレイがみたいんでしょ？」

「えっ？」

なっ……なんでわかってしまったのだろうか……

俺は目を泳がす。心臓の鼓動がもの凄く早く鳴り響く。

「そんな顔してるんですもの。わかるわよ。
こんな話をしていたうちについたわよ。」

出入り口のハッチが開く。ＭＳが通れるぐらいの大きさのハッチだ。

車が少しずつ中へと入っていく。

第一話　？　M1アストレイとの出会い（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

第一話　？　Ｍ１アストレイとの出会い

車を乗せた台はゆっくりと地下に降りていく。
少し鳥肌がたってきた。
寒いのもあるのかもしれないが、
Ｍ１アストレイをこの自分の目で見ることができるなんて不思議な感じだ。
降りている最中にエリカさんは俺の顔をじーっと見てきた。
俺はとってもにこやかな顔をしているから変だと思っているのだろうか。

「あの……なんでしょうか……」

「いや。本当にうれしいんだなって思ってね。」

「正直嬉しいです。この目でしっかりとＭ１アストレイを見ることが出来ますから。」

その嬉しさとは真逆に悪いことも俺は考えていた。
このＭ１アストレイを強奪して、地球軍を倒そうと考えていた。
いけないことだと思っていても考えてしまう。

俺がこんなことを考えている最中に地下施設に着いた。
狭いと思っていたが結構広い。天井も高い。

「さぁ。車から降りて。」

「はい。」

俺は車から降りる。
周りを見渡すとオレンジ色や水色の作業服を着ている人や、
オレンジ色の上着を着ている人がたくさんいる。
この人たちはＭ１アストレイに関係のある人たちなのだろうか。

「さぁ。ヒジリくんが見たがっていたＭ１アストレイが収容されているところよ。」

「ここが……」

俺の目の前には大きなトビラが立ちふさがっていた。
そのトビラはゆっくりと音を立てながら開いていく。
そこには作業をしている人たちがたくさんいる。
ここに収容されているＭ１アストレイより作業をしている人のほうが多い。
当たり前なのかもしれないけど。
俺は始めてみる光景だからこんなことしか感じることができない。

「うわぁ……すごい……」

目の前に広がる憧れのＭ１アストレイ。憧れ？いつのまに俺の憧れになったんだ？
まぁいい。俺は口を開けたままＭ１アストレイを一つ一つゆっくりと見る。
俺はＭ１アストレイの足を触ろうとした、そのとき。

「ヒジリくん、触ってもいいけど……Ｍ１アストレイに乗ってみない？」

「えっ！いいんですか！！」

俺は今まで以上に嬉しい顔をした。
俺の手はたくさんの汗をだしていた。そうして心臓が全身に血を送るスピードも速くなる。
エリカさんはくすっと笑い俺をＭＳ試験場につれていってくれた。

第一話　？　Ｍ１アストレイとの出会い

その扉が音を鳴らして開くと、
目の前にはパソコンがぎっしりと詰まっている。
その先にはガラスの壁があった。そのガラスの向こうにはＭ１アストレイが凛々しく立っている。
俺は口を大きく開ける。あごが外れそうになるくらい。

エリカさんが

「ついてきなさい。」

といったから、俺はついていった。
俺は小さな扉の前に立たされた。エリカさんが何も言わずに静かに扉を開ける。
その扉の向こうにはＭ１アストレイのコックピットがあった。
今、俺の目の前には夢に見ていたコックピットがある。本当に夢でも見ているようだ。
小さな音を立てながらコックピットが俺の前でどうどうと開く。
それはまるで、俺においでといっているように。
俺は一歩一歩コックピットに入っていく。
俺の心臓がもう少しで爆発でもするのではないかと俺は思った。
そうして操縦席に座る。周りにはスイッチやボタンがたくさんついていた。
一体どのスイッチがどんな役割を果たすのか、全くといっていいほどわからない。
静かにコックピットがしまる。しばらくすると画面に明かりがついた。

目も前にはガラスの向こうに人がいるのが見える。
下を見るとただ高いところにいて何かに座っているという感じだ。
小さな画面にエリカさんが写った。エリカさんが俺にマイクを通じで話をかけてくる。

「乗り心地はどうかしら？」

「産まれて始めての乗り心地です。
良いといえばいいのか悪いといえばいいのかわかりませんよ。
でも、M1アストレイの中がこんな感じなんだということがわかって嬉しいです！！」

そんなことを言っておきながら自分の太ももの上においてある自分の手ががくがくに震えている。
手には汗もかいている。
そんな様子が見えたのかはわからないけど、エリカさんがにこりと笑い驚くことを言ってきた。

「一回、M1アストレイを動かしてみたらどう？好きに動かしてくれてかまわないわ。」

「えっ……いいんですか？」

「もちろんですとも。」

俺は今までで一番の喜びの顔をする。
エリカさんの返事のすぐあとに俺は操縦席の真横にある、車でいうハンドルらしきものを握りしめた。
これをなんていうのかは俺はわからないから。

（なんだろう……動かせる……ような……）

俺はそう思い、車でいうアクセルを右足で踏んだ。

第一話　？　Ｍ１アストレイとの出会い（後書き）

感想、評価などお待ちしています！！

第一話　？　M1アストレイとの出会い（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

第一話　？　Ｍ１アストレイとの出会い

Ｍ１アストレイは高く飛んだ。そして着地する。
そのほかにもいろいろな動きをしてみた。
ビームサーベルを出してみたり、ビームライフルを出してみたり。
Ｍ１アストレイはとっても動かしやすいと俺は思った。

「もう、いいかしら？」

と、エリカさんがモニターに移り俺に話をかけてくる。
俺は夢中になっていてエリカさんの話は聞こえていなかった。
エリカさんはさっきよりも少し低い声でもう一度俺に言う。

「いいかしら？」

「あっはい！」

そういって俺はあわててＭ１アストレイを降りた。

俺はＭ１アストレイに乗った感想を興奮した状態でエリカさんに話した。

「とっても動かしやすかったです！オーブの技術はすごいですね！」

エリカさんはくすくすと笑う。
エリカさんは俺に教えてくれた。
Ｍ１アストレイは、最初はとっても動かしにくかったのだと。
しかし、それをナチュラルでも動かせるようにＯＳを書き換えてく

れた人がいるというのだ。
それは、元フリーダムのパイロット、キラ・ヤマトさんが書き換えたという。
オーブのために戦ってくれた。俺にとっては神様のような存在のお人だ。

「そうなんですか。」

と俺は言った。

エリカさんはずぐにまじめな顔になり、笑顔の俺に話しかけてきた。

「ヒジリくん。オーブ軍に入らない？」

「え？」

俺は目を見開いた。

「そっそれはどういうことなんでしょうか……」

エリカさんはゆっくりと目を閉じ、ゆっくりと目を開ける。
そうして俺の方を真剣な目で見てくる。俺は少しドキッっとした。

「ヒジリくん、あなた、コーディネーターでしょ？
コーディネーターが入ってくれれば戦力が上がると思うの。」

「えっ……えーと……」

俺の心臓に何か突き刺さったような感じがした。
どきどきと痛さが混じっている。

エリカさんはいつもの笑顔に戻った。

「まぁ、ここにコーディネーターがいるってことは不思議ではないわ。
ナチュラルといってコーディネーターの人もたくさんいると思うし。」

「そう……ですよね。」

「まぁ……私もね……」

俺は「私もね……」という言葉に少しひっかかり、恐る恐るエリカさんに聞こうとした。

「あっあの！エリカさん……」

「何？」

「エリカさんは……コーディネーター……」

「私はナチュラルよ。」

いつもの笑顔で、答えは即答だった。
迷いがないような言い方だ。でも…なぜだろうか、違和感を感じる。

「そうですか。」

俺はそれしか言えない。
嘘だなんていえるわけがない。自分はナチュラルだと言い張ったから。

「それで、どうするの？オーブ軍に入らないの？」

「あっ……俺……コーディネーターですけど……いいんですか？」

「大丈夫よ、心配しないで。私に任せておいて。」

「それじゃ……お願いします！」

俺はエリカさんに深々とお辞儀をした。

俺がエリカさんとこんなことをしているうちに、
カガリ様とアレックスさんは大変な目にあっていた。
プラントで最新ＭＳの奪取の事件に巻き込まれていたのだ。

第二話　？　出会いと再会と（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

第二話　？　出会いと再会と

俺がエリカさんにオーブ軍に入らないかと言われて数日がたった。
この数日で、俺は正式なオーブ軍軍人になれた。
階級は低いが、オーブの軍人になれたということに俺はとてもうれしい。
もちろん、“ナチュラル”としてオーブ軍に入った。
俺が上司の人に挨拶をしにいったときその人は言っていた。

「オーブ軍にはコーディネーターだということを偽りナチュラルとして戦っている奴もいる。
　ま、どうにもならないんだがな。」

と。
俺はこれを聞いていたとき、とっても緊張した。
俺がコーディネーターだということがばれてしまうのではないかと。
しかし、そんなことをいちいち気にしていては何もできなくなってしまう。
俺は普段通りのことをしようと思った。

よく考えてみると、軍人になった俺は勝手にいろんなところに行ってもよいのだろうか。
このほかにもいろいろと考えてしまう。

俺は今、地下施設で“俺の”Ｍ１アストレイを調整している最中だ。
ナチュラルでも動かせるようになっているＭ１アストレイは動かしやすぎて少し扱いにくい。
悪いことをしているとわかっていても自分の動きやすいＯＳに置き換えてしまう。

といっても、エリカさんには自分でＯＳを書き換えてしまってもよいといわれていたけど……
それを言われて「別にＯＳなんて書き換えなくてもいいよね」なんて思っていたら……動かしやすすぎて、自分でＯＳを書き換えることになるなんてね……少し、面倒だよ。
でも、そうでもないといざというときに本気が出ないからね。
そんなことを考えていると、放送からエリカさんの声が聞こえてきた。

「皆よく聞いて。ユニウスセブンが地球に落ちてくるそうよ。」

え……？あの、地球の周りを回っているユニウスセブンが……？
たった、数秒で俺のＭ１アストレイの周りはざわつき始めた。

「それで、お願いがあります。決して地上に出ないでください。
状況が気になると思いますけど……とにかく、地上には出ないでください。お願いします。」

プツッと放送が途絶えた。
俺たちは地下に居るから大丈夫なのだろうか。しかし、天井や壁が崩れないのだろうか。
俺は心配と不安でコックピットからでてしたに下りる。

「ここに居て大丈夫なのかな……」

下を向いて、不意に口からこぼれでてしまった言葉に俺と同い年の男の子が声をかけてきてくれた。

「ここに居れば大丈夫ですよ。心配しないでください。」

「君は……？」

「僕は昨日オーブ軍に入った、レクナ・フレシーです。たぶん……同い年ですよね。
よろしくお願いします。」

レクナ・フレシーという男の子は礼儀正しく自己紹介をした。
俺はそれにつられて、礼儀正しいかよくわからない自己紹介を返した。

「ヒジリ・フェスタークです。よろしくです。」

よっよろしくです？それをいうなら、よろしくお願いしますだよね？
なんて自分で言ったことに対して自分でつっこんだ。

「ヒジリ君ですか。僕のことはレクナと呼んでください。あっフレシーでもいいですよ。」

「いや。レクナって呼ぶよ。俺のこともヒジリって呼んで。」

「わかりました！！」

できれば敬語もやめてほしいといいたいけれどなぜか言い出せなかった。
レクナは俺よりも身長が低い。
顔ははっきり言ってすごくかわいい。女の子ですよね、と言いたいくらいだ。
そんなかわいい顔で満面の笑みを俺に向けてくる。
なんだかわからないが、レクナという友達（？）戦友（？）に出会えてうれしかった。

こんな出会いがあったとき、ユニウスセブンはもう大気圏に突入していたのだ。

第二話　？　出会いと再会と（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

楽しんで読んでくださると嬉しいです！！

第二話　？　出会いと再会と

俺はレクナに質問をした。

「レクナもＭ１アストレイのパイロットなの？」

「はい。って…『も』ということは、ヒジリもＭ１アストレイのパイロットなんですか？」

「うん。」

「そうなんですか！！嬉しいです！！」

レクナは満面の笑みを俺に向けてくる。かっカワイイやつめ……

こんな話をしていると、またエリカさんからの放送が入った。

「ユニウスセブンが大気圏に突入しました。

地下といっても被害がでる確率もあります。

パイロットはＭ１アストレイで待機。その他の者は直ちに安全なシェルターに非難してください。」

この放送が終ると、周りで作業をしていた人が一気に作業をやめ、シェルターの方へ走っていった。

レクナがその人たちにつられて、シェルターの方へ走りだそうとした。

俺はレクナの肩をぐっと掴み言った。

「レクナもＭ１アストレイのパイロットなんでしょ。

それならＭ１アストレイで待機していないといけないよ！！」

「はっはい！！いや……でも、パイロットスーツが……」

「そんなの着ている暇は無いんだ。緊急事態なんだよ。
俺達の先輩も、皆着ていないんだ。」

「そっ……そうですか……」

「とにかく、乗るよ。」

「はい！！」

レクナと話していた場所は？俺のＭ１アストレイ？の前だったから、
そのまま後ろを向いて走ってコックピットに乗り待機をした。

ドーーーーンッ

ユニウスセブンの破片が地上に落下した音が聞こえた。
それはもう、ドーーーンッというレベルの音ではない。もっと迫力のある音。
どんなふうに音を表現すれば良いのかわからない。
落下の振動はもう１０分ぐらい続いている気がする。
その１０分ぐらいの長い時間にレクナは大丈夫かなと１００回以上は思っていた。

しばらくすると、かすかではあるが美しい歌声が俺の耳に響いてきた。

「こんなに冷たい、帳の深くで、貴方は一人で眠ってる……」
と。何故か心が落ち着くような歌声。安心できるような歌声。守られているような歌声だ。
耳に聞こえてくる歌を聞きながらまぶたを閉じると、まぶたの裏に今の地上の様子がかすかに見えるきがした。
逃げ場をなくした人や動物が被害にあっているのがまぶたの裏に写しだされる。
決して良い風景ではない。
俺はその風景に目を閉じるのではなくまぶたを開いてしまった。
歌声が聞こえなくなると、揺れもおさまった。
さっきの歌声は一体誰の歌声なのだろうか……
すごく……きれいな歌声……

「皆さん、もういいわ。待機を解除します。シェルターから出たら仕事を再開してください。」
エリカさんの放送がコックピットの中で小さくこだまする。
エリカさんは何か思いついたように俺とレクナの名前を放送で言った。

「ヒジリとレクナは私のところに来て。私の部屋まで。」
俺はそれを聞いた後にすぐにコックピットからでた。
コックピットから下に下りているときにレクナがヒョコッと下に現れた。

「ご無事で何よりでした。」

「それは俺の台詞だよ。って先に行っていればいいのに。」

「あっ……え～とですね、ヒジリは僕のＭ１アストレイの隣なんですよ。」

「あっそうなの？とにかく急いでいこう。」

俺はそういい、レクナのいい返事の後に走ってエリカさんの部屋まで行った。
レクナもかわいい顔をしておきながら走るのは結構速いほうだと感じた。

「よし、ついた。」

俺は服を正す。横にいるレクナの服をみると完璧に綺麗だった。
（まぁ……入ったばっかりだしね……）
そして俺は二回ノックをし、「失礼します」と言ってドアを開けた。
そこには、怒っているように見えるエリカさんが椅子にドンと座っている。

第二話　？　出会いと再会と（後書き）

途中で出てきた「こんなに冷たい、帳の深くで……」は、ラクス・クライン（ＣＶ：田中理恵）の『Ｆｉｅｌｄｓ　ｏｆ　ｈｏｐｅ』という曲です。ガンダムＳＥＥＤＤＥＳＴＩＮＹの挿入歌です。

第二話　？　出会いと再会と（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

楽しく読んでくれると嬉しいです！！

第二話　？　出会いと再会と

エリカさんの座っている態度に俺は自分とレクナが何をしたのか、思い当たることを考えた。
ただ一つだけ頭に浮かんだことがあったが……
今の状況を考えればこれしかないと思い、俺はエリカさんに深々と頭を下げ、言った。

「遅れてしまってすみませんでした！」

俺の行動を見たレクナも同じように深々と頭を下げる。
エリカさんが何かを言うまで、ずっと頭を下げていた。
しばらくするとエリカさんはくすくすと笑い、笑いをこらえた声で言う。

「そんな。いいのよ。ごめんなさいね。
私がこんな態度をしていたら二人は一体どんな反応をするか試したのよ。
でも、いい反応でよかったわ。」

俺とレクナは頭を上げると、顔を一度向き合わせた。
俺が、

「そうだったんですか。」

とエリカさんのほうを向いて言葉を返すのと同時に、レクナはエリカさんに満面の笑みを見せた。
エリカさんは笑うのをやめいつもの笑顔で俺とレクナに質問してきた。

「貴方達は、カガリ様のことどう思ってるの？」
「とても、すばらしい方だと思っています。」
「僕もヒジリと同じ意見です。
カガリ様はとてもオーブのことを大切に思っていらっしゃいますし。」
「そう。」
エリカさんは少し笑いながら目をつむり下を少し向いた。
なぜか、喜んでいるように見える。
エリカさんは表情をかえ話の内容を変えた。
「もう知っているかもしれないけれど、
カガリ様はプラントの新造艦、ミネルバに乗っていらっしゃるわ。」
そんなことは知らなかった。
俺は驚きのあまりレクナの顔をチラッと見た。
そのときのレクナは俺以上に驚いている顔をしていた。
「そのミネルバはユニウスセブンの破壊に参加したわ。カガリ様を乗せたままでね。
でも、安心して。ミネルバに連絡が取れてカガリ様は無事だということもわかっています。
それで貴方達にみてきてほしいものがあるの。いいかしら？」

「はい！！」

俺とレクナの大きな声が重なり、部屋中に響いた。
しかし、すこし不安な音程もはいっていた。

「貴方達はモルゲンレーテ社に行って、プラントの新造艦ミネルバを見てきて。
まだ着いてはいないけれど……
きっと貴方達の世代では知っておかなくてはいけない船だと思うから。
生でみたほうが、迫力があって良いと思うの。
生でみた感想も聞かせてもらいますからね。しっかり見てくること。
もちろん、軍服で行くこと。」

「了解です！！」

そして、数時間後。俺とレクナはモルゲンレーテの本社へ、ヘリで移動した。
モルゲンレーテ本社に近づくにつれて車の数が増えてきたように感じる。
皆目的は同じなのだろうか。
俺とレクナはヘリを下り、モルゲンレーテ本社の中に入った。
入り口から部屋の中に入ると目の前には大きなガラスがあった。
その向こう側にはエリカさんが言っていたミネルバがでかでかとある。

「すっすごい……」

生でみるプラントの母艦に、こんな言葉しか出なかった。

レクナは言葉一つ口にださない。
もし、ザフトと戦うことになったら、ミネルバと戦うと思うと背中に寒さが走る。
こんなものに勝てるのかと。
ミネルバの周りにはたくさんの武器がつけられている。
これをみたとき俺は、もの凄くでかい『MA（モビルアーマー）』だと思った。

第二話　？　出会いと再会と（後書き）

最後のモルゲンレーテの『部屋（大きなガラスの部屋）』はマリュー・ラミアス（ＣＶ：三石琴乃）とアンドリュー・バルトフェルド（ＣＶ：置鮎龍太郎）がいた場所です。（もしかして初登場の場所？）

第二話　？　出会いと再会と（前書き）

『この小説について』を読んでから読んでください。

今回はちょっと暗いお話です！

第二話　？　出会いと再会と

「凄いですね。ココまで大きいのは軍人になって初めてみましたよ。」

「軍人になってって……軍人になる前にもこんな大きい船をみたことがあるの？」

「はい。」

レクナはいつもの笑顔で俺に返事を返した。
しかし、その笑顔は少し心に詰まっているものがあるような笑顔だ。
何か悲しそうなことを思い出したのだろうか。

俺はどこで見たのかとレクナに聞いた。
レクナは、

「大西洋連邦がオーブのオノゴロ島に攻めてきたとき、たまたま？アークエンジェル？をみたんです。
　このミネルバと同じくらいの大きさでした。」

と言った。
言い終わるとレクナは下を向き唇をかみ締めた。
今にも泣きそうな顔になる。レクナも俺と同じ戦いで両親を亡くしたのだろうか……
俺は一瞬それをレクナに聞こうとした。
しかし、今それを聞いてどうにもならない。かける言葉が見つからない。
俺も同じだといって俺の話を長々としても意味が無い。

そう思って聞かなかった。
あの戦いは俺の両親だけが犠牲になったわけじゃないから。

「ヒジリ……僕の話を聞いてくれますか？」

レクナは、あと少しでも声を出すと涙を流すような声で言った。
俺は「うん」という言葉を返したあと、レクナを椅子に座らせた。
レクナは深呼吸を二回ほどし、下を向いたまま話し始めた。

「僕にはもともと両親がいません。僕がまだ子供の頃に亡くなりました。
と言っても今も僕は子供なんですけどね。あはは……」

レクナはたいして面白くないことを言った。
俺はレクナの頭に軽くポンッとグーでたたいた。
レクナは少しくすくすと笑い、話を続ける。

「でも、両親が亡くなっても僕は一人ぼっちではありませんでした。
僕にはまだ姉がいたんです。僕は姉に頼ってばかりでした。
弟だといわれて何もかも自分でやる姉は僕の自慢の姉です。
ですじゃなくて……だったんです……
さっき、アークエンジェルを見たって僕言いましたよね。」

この質問を俺にしたとき、レクナは顔をあげ俺の顔をみた。
俺は少し低い声で

「うん。」

と言った。

「そのときなんです。姉が亡くなったのは。
僕が、アークエンジェルを見つけてそこで立ち止まってしまったんです。
姉は必死に走っていきました。
しかし、姉は振り返り僕の姿がないのを見てすぐに戻ってきてくれました。
それがいけなかったんです。
僕を目掛けて黒いものが飛んできました。姉は僕をかばい、僕の目の前で死にました。
お腹から真っ赤な血がたくさんとでていました。
姉の目は大きく見開いていました。目の玉が飛びだしそうなくらいに。」

レクナはついに耐え切れずに声を少し漏らしながら下を向き泣いた。
少しもれている泣き声は俺の心に矢が刺さるような声だった。聞いていてとても辛い。
俺と同じ戦いで大切な人を失っている。ただ、立場が違うだけ。
俺は朝起きるとテーブルの上に置手紙がされてあってその内容が、

「今日も、お父さんとお母さん無事で帰ってこれるかな？
帰ってこれるように祈っていてね。
もし一人になっても、お父さんとお母さんはすぐそばにいるからね。
安心してね。　　母より　　」

という内容。毎日同じ内容。しかし、毎日違う紙で違う色のペンで形の違った字で書いてある。
毎日毎日同じ内容をわざわざ書いて母は戦いに向かっていった。
ときどき、『母より』の隣に『父より』というのもかいてあるとき

がある。
そのときは、本当に帰ってくるの？と思ってしまう。
二人の名前が書いてあるときは戦いがあるから、怖くて仕方が無かった。
大西洋連邦が攻めたときの手紙にも『母より　父より』と書いてあった。
これを読んだとき、体に電気が走ったようにブルブルッと震えた。

しかし、レクナの姉はレクナのそばにいつもいた。
戦いに行く者とそばにいる者。
同じ戦いで亡くなっていても涙を流す量が同じでも思いは少し違う。

レクナは泣きながら小さな声で言った。

「あの時……お姉ちゃんが振り向かなかったら……
お姉ちゃんが少しでも振り向くのが遅かったら……
ぼっ僕が……産まれていなかったら……」

俺は産まれていなかったらという言葉に体が震えた。

「産まれていなかったらなんていうな！！」

俺は大きな声で言った。
周りの人は俺たちのほうを向いたが、部屋中はミネルバのことでざわついていて気付いていない。

「お姉さんが一人だったら心がこれそうになってたに違いないよ！！

まだ……まだ、レクナがいたから頑張ろうって、心が折れずにいたんだ！！

だから……そんなこというんじゃない！！産まれたことに誇りに思わないと行けないんだ！」

俺は息を切らす。レクナは驚いた顔で俺を見る。
まさかこんなに大きな声でいうとは自分でも思わなかった。
レクナの姉が一人だったら、俺と同じ道を歩んでいたに違いないとおもったから。
俺も一人になったときの気持ちは痛いほど知っているから。
だから、兄弟でもいい、近くに大切な人がいれば心が折れずにいられるってことぐらいわかる。

第二話　？　出会いと再会と（前書き）

『この小説について』を読んでから読んでください。

楽しく（？）読んでください。

第二話　？　出会いと再会と

俺はレクナの腕をガシッと掴み、レクナの体を揺さぶりながら言う。

「レクナはお姉さんの分まで生きて戦わないといけない！！
私の分まで頑張ってっていってるよ！！俺にはわかる！！」

レクナの目からはもう涙は止まっていた。
目にたまっている涙がゆっくりと頬を伝って静かに俺の腕に落ちる。
その涙の感じはとても思いのこもった、暖かい涙のしずくだった。
レクナは「うんうん」と首を上下に動かし、俺の腕をグッと掴み自分の腕を掴んでいる俺の手を下ろした。
その後レクナは軍服の袖で目にたまっている涙をふき取った。
レクナの目は真っ赤に晴れ上がっている。

「そうですよね……ヒジリの言う通りかもしれません。
僕が生きているのは姉が僕に命を託したってことですよね。
小さい頃は僕が姉に頼っていたけど、今は姉が僕に頼ってくれてるんですよね。」

レクナの声は、少し鼻声だった。
俺は大きくうなずく。

「そう思うと今まで以上に頑張れる気がします。
それと、軍人になってよかったって。自分の道は正しかったんですよね。
僕の話を聞いてくれてありがとうございます。」

「いいよ。」

レクナはやっと、いつもの笑顔に戻った。とても気持ちが良さそうな笑顔だ。
俺も笑顔を返した。
ココで俺は「そろそろ戻ろう」とレクナに言った。
レクナは「はい」といつもの調子で返事をした。
廊下にでてヘリへ向かっているとき、俺はふと思ったことを何も考えずにレクナに言った。

「さっき思ったんだけど……レクナはなんで軍人になったの？」

レクナは驚きもせずにいつもの表情で質問に答える。

「はい。姉が目の前で亡くなったとき、僕が軍人だったらこんな戦いはしないって思ったんです。」

「え～と……意味がわからないんだけど……」

俺は右手で頭をかきながら言った。

「あっすっすみません！！
あの時、僕だったら、民間人を巻き込まない戦いをすると思ったんです。
たとえ敵である民間人でも、見方の民間人でも。民間人は戦いには関係ないと僕は思うんです。」

俺は「そうか」と返した。確かにそうだ。
俺も小さい頃はそんなことを良く考えていた。
周りで戦争が起きていて民間人が被害にあったとニュースなので聞くたびに、

俺達は戦争に参加しているわけじゃないのになぜ被害にあわないといけないのかと思っていた。
戦争は関係の無い人々まで巻き込んでしまうもの。
毎日の日常が平和だとは感じられないんだ。

レクナは俺の顔をジーッとみている。

「どうしたの？」

レクナの顔は不思議そうな顔をする。

「いえ。ヒジリはなぜ自分のことを話してくれないんだろうと思ってですね……」

「えっ？」

「いやっ！嫌ならいいんですけど……なぜ話してくれないんだろうと思って……」

俺は一度下を向きすぐにレクナの顔を見た。

「俺のことしりたいの？」

「はい！！しりたいです！！」

レクナは飛び上がったウサギのように返事をした。

「でも……俺のことを知ってもどうにもならないよ？」

「それでもかまいません。一つだけでもいいので何か教えてくだ

さい。
僕が教えたのにヒジリが何も教えてくれないのは少し不公平だなと思うので。」
俺は「フッ」と笑った。確かに不公平だよね。
俺はゆっくりと口を開け、話し始めた。
「俺の親は軍人だったんだ。レクナのお姉さんがなくなった戦いで両親は戦死した。
そうして俺は、地球軍を許せなくて軍に入ったってわけだよ。」
「そうなんですか。地球軍を倒そうと思うなら、ザフト軍でもよいのでは？」
俺は少しドキッとした。
しかし、ここで表情を崩してしまうとレクナにばれてしまうと思い、いつもの表情で言った。
「ちょっとまってよ。俺はナチュラルだよ。コーディネーターじゃない。」
レクナはあっとした表情を浮かべ「すみません」と頭を何回も何回もさげた。
「いいよ。気にしないで。
俺も最初、ザフト軍に入ったほうがいいんじゃかいの？って自分で思ったから。
笑えるよね。コーディネーターじゃないのに。」
俺は普通に話して、普通に笑った。

コーディネーターじゃないといっているときは自分に嘘をついていてとっても辛かった。
でも仕方が無い。そうしないといけないんだよ。

「そうですね。
だから、オーブ軍に入ったんですね。」

レクナもくすくす笑う。俺は「うん」とうなずく。
しかし、地球軍を倒す以外は全部嘘。
あの時アカツキ島に行ったのはＭ１アストレイを強奪するため。
いけないことだとわかっていても思ってしまった。
エリカさんに軍に入らないかといわれていなかったら、本当に強奪していたに違いない。

ヘリに乗り込み地下施設に戻ろうとしていたときレクナがボソっとあることを言った。

「カガリ様に会えると思ったんですけど……会えませんでしたね……
はぁ……ちょっとショックです……」

「そうだね。ちょっと残念だね。」

この会話以外、ヘリの中では何もはなさなかった。
そして、地下施設に到着し、エリカさんに報告をしにいった。
俺は服を正した。隣にいるレクナをみるとやっぱり服は綺麗だ。
（まぁ……昨日入って来たばっかりだしね。）
俺はエリカさんの部屋のトビラをグーで軽くたたいた。

「ヒジリ・フェスターク、レクナ・フレシー、帰還しました？」

慣れていない言葉の語尾にクエッションマークを浮かべてしまった。
レクナのクスッと笑った声に、俺もつられてしまい笑ってしまう。

「どーぞ。」

エリカさんが言う。
俺とレクナは部屋に入り、エリカさんが座っている椅子の近くまで行く。

「あら。お帰りなさい。さっ、どうだったかしら？」

俺が一歩前に出て最初に感想を言った。

「はい。一言でいうと……ものすごく大きいＭＡって感じですね。」

「僕もヒジリと同じです。アークエンジェルと同じ大きさだと思います。」

エリカさんは笑顔で「そう」と言った。
しばらく間が空くと、エリカさんはくすくすと笑い始める。
俺とレクナは顔を見合わせた。

「さすが私が見込んだ人たちね。」

「え？」

俺とレクナの声が重なる。

第二話　？　出会いと再会と（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでください。

第二話　？　出会いと再会と

「エリカさん……それは一体どういうことなのでしょうか……」

俺が恐る恐る聞くのに対し、エリカさんは驚いた顔をして返事を返した。

「あら？まだ言ってなかったかしら？」

「はい。」

俺とレクナの声がまた重なる。

エリカさんは申し訳なさそうに苦笑いをしてこう話してくれた。

俺とレクナをオーブ軍に入れたのは自分だと。

先に誘ったのはレクナの方だと。

レクナも俺と同じように地下施設の入り口付近をうろうろとしていたらしい。

っということは……レクナもＭ１アストレイを目当てで来たのだろうか……

エリカさんはそんな話をしているときにいつの間にか優しい笑顔に戻っていた。

そして、話は変わり……

「それで、カガリ様にお会いできたかしら？」

俺は浅いため息をエリカさんに聞こえないようにはいた。

そして、少し残念そうな顔で

「残念ながら会えませんでした。」

と言った。

エリカさんも目を瞑り軽くうなずきながら「そう」と言った。

「カガリ様は忙しい方ですから、すぐにミネルバを下りられたと思いますよ。

たまっているお仕事もあると思いますし。」

「そうね。レクナのいうとおりだわ。カガリ様はお忙しい方だから。」

エリカさんの言葉の最後になぜか静かな沈黙が続いた。

初めて時間が止まった感覚を味わった。

何か、思うところがあるのだろう。俺も何かが頭を過ぎった。

そして……

「お疲れ様。今日はもう休んで良いわよ。」

エリカさんの言葉で周りの空気や時間が普通に動き始めた。

「休みをあげるから、2人で遊んでくるといいわ。」

「いいんですか？」

俺が聞いたらエリカさんは微笑んで「ええ」と言ってくれた。

俺とレクナはエリカさんにお礼をし、エリカさんの部屋から出た。

廊下に出てすぐに俺は笑顔でレクナに聞いた。

「レクナこれからどうする？エリカさん、遊びに行っても良いって言ってたよね。
どこか一緒に行かない？」
レクナは少し黙り込んだあとに苦笑いをしながら答える。
「いえ。僕は良いです。ちょっと気になることがあるので……その……」
レクナは下を向き完全に黙り込んでしまった。
「どうしたの？」と声をかけたくなったがほうっておいたほうがいいと思い声をかけるのをやめた。
レクナに何があったかはわからないけれど、俺が口を出さないほうがいいと思ったから。
「わかった。それじゃ、一人で行ってくるよ。」
俺は、さっきと同じ笑顔でレクナに言った。
レクナは申し訳なさそうにお辞儀をして廊下を走り去っていく。
そして俺は一人で、大西洋連邦が攻めてきたところにある慰霊碑に訪れた。
そこはとても静かできれいになっていて、海岸沿いにはきれいな花がたくさん咲いている。
俺は慰霊碑の目の前で亡くなった両親にしゃがんで話をかけた。
「ここは……こんなにきれいになってしまったね。
一人で逃げているときは頼る人が居なくて本当に怖かったよ。
逃げるのに必死だったけど、父さんと母さんが無事で居てくれ

るように神様に祈ってたよ。」
俺の目には少し涙があふれてきた。
「父さんと母さんが亡くなって一人になって……2年間すごく怖かった。
でも、今は父さんと母さんと同じでオーブ軍の軍人として戦い始めたよ。
2人を殺した地球軍を倒すために。見ててね。俺がんばるから！！」
最後に俺は慰霊碑に向かって満面の笑みを浮かべた。
そして、目を瞑り両手を合わせて慰霊碑に向かって祈った。
「どうか、俺のことを守ってください。」
と。
祈り終わり目を開けゆっくりと立とうとしたとき、後ろからジャリッという音が聞こえた。
その音が聞こえた瞬間に俺は速く立ち上がり後ろを振り返った。
そこには黒っぽい服に茶色の髪、そして紫色をした瞳の男の人がいた。
もちろん、俺より年上の人だ。
その男性は微笑んで俺に話をかけてきた。
「それは……慰霊碑？」
「はい。そうです。」
「君の大切な人も、あの戦いでなくなったの？」

「はい。とっても大切な人が……」

俺は相手の顔を見れず、相手が立っているの斜め下の地面を見て言った。

男性は少し心配そうな顔で俺に言った。

「もしかして、泣いていたの？」

「いえ！泣いてませんよ！」

図星だ。

「男の俺が泣くわけないですよ！！」

強気の発言をしたが少し心が痛くて苦しくなり涙があふれてきた。

「そんなに強がらなくて良いよ。僕も、泣き虫だったから。」

「えっ？そんなふうには全然見えない……」

男の人は少し微笑み俺に過去の話をしてくれた。

「さっき泣き虫だって言ったよね。

でも、だんだんと成長していって泣かないように我慢してたんだ。

でもね、我慢はしちゃいけないって教えてくれたんだ。

悲しいときは泣けばいいんだよって大切な人に教えてもらった。

だから、我慢なんてしなくて良いんだよ。」

男の人の言葉は胸に響いた。
彼の大切な人というのはきっと今でもそばに居て、彼を助けてくれる人だと俺は思った。
俺は声を殺し、下を向いて泣いた。
「怖かったんです……あの、戦いの中を一人で逃げているのが……両親を殺されて……頼る人も居なくて……一人で生きていたのが……」
男の人は俺に近づきもっと優しい言葉をくれた。
「でも、君はもう一人じゃないよね。大切な友達や仲間が居るよね。だから、もう大丈夫だよ。」
優しく言われたその言葉は俺の心の中にゆっくりと染み渡っていく。
俺は我慢の限界がきて、とうとう声を少し漏らして泣いてしまった。
俺は、彼の言葉で少し救われた気がした。

――――――――――――――――――

数分が立って興奮した気持ちも落ち着き、男の人にお礼を言った。
「恥ずかしいところをみせてしまってすみません。もう平気です。ありがとうございました。」
俺はお辞儀をする。
男の人は微笑み、俺の名前を聞いてきた。
「君の名前は、なんていうのかな?」

「俺の名前は、ヒジリ・フェスタークです。」
「ヒジリ君だね。僕の名前は“キラ・ヤマト”。よろしくね。」
「あっはい。こちらこそよろしくお願いします。
それでは、失礼します。」
俺はキラ・ヤマトさんにお辞儀をし、その場から立ち去った。
（って……キラ・ヤマト？どこかで……）
そんなことを思いながら帰っているとき、
2年前にイージス艦に乗っていた男の子にそっくりな子と出会ってしまった。
「君は……？」
俺が言うと彼は少し睨んだ顔で俺を見てきた。
「何か？」
彼は睨んだまま、俺に返事を返した。
俺は恐る恐る彼に話をかけてみる。
「いや……あの……俺とどっかってあったこと無いかな？
俺は、君とどこかであった記憶があるんだけど。」
「俺は君なんかしらない。」
彼の答えは即答だった。俺は彼の即答に負けじと次の質問をした。

「じゃ！大西洋連邦がオーブに攻めてきたとき、君はイージス艦に乗っていた？」

彼は何も答えなかった。

「それじゃ。女の子が持つようなピンクの携帯電話を持ってない？」

これも彼は何も答えない。

「じゃ……君の名前を教えてよ。俺の名前は、ヒジリ・フェスターク。

人の名前を聞いておいて……自分の名前を教えてくれないって言うのは常識としてなしだよね。」

彼は大きなため息を一つつき、名前を教えてくれた。

「俺の名前は、シン・アスカ。用は済んだだろ。」

そういってシン・アスカは俺の横を通っていった。

俺は後ろを振り返り「ありがとう」と大きな声で言った。

このまま前を向いて帰ろうとしたとき、彼のポケットにピンク色の何かが見えた。

俺は目を凝らしてみてみると、

間違いなくイージス艦でであった男の子が握り締めていたピンクの携帯電話だった。

この後、俺は黙って2人の名前を覚えながら帰った。

名前を覚えて帰っているとき、キラ・ヤマトとシン・アスカがあの

慰霊碑の前で出会って居る頃でした。

第三話　？　初めての戦場（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでくれると助かります。

第三話　？　初めての戦場

あの出会いと再会から数日がたった。
今も俺はキラ・ヤマトさんの名前をどこで聞いたかを思い出している。
すごい人だったような気がするのは確かだ。でも、思い出せない……
休憩室の椅子に座り頭を抱えて悩んでいるとレクナが現れた。

「ヒジリ、どうかしましたか？」

レクナは心配した声で俺に話をかけてきた。
俺は「いや」といいながら頭を抱えたままひじをひざの上におく。
考えれば考えるほど頭がいたくってきた。
別にこんなに深く考えなくていいものの何故か深く考えてしまう。
レクナはよほど心配したのだろうか、少し怒ったような口調でいう。

「どこがいや、なんですか。どうかしたようにしかみえませんよ。」

俺は口には出さなかったが「うっ」と思った。
レクナにはかなわないと思い話すことに決めた。それほど大したことでもないし。
レクナは俺の前の椅子に腰をかける。

「数日前の話なんだけどさ、慰霊碑におまいりにいったんだ。
そのときに、キラ・ヤマトさんに会ったんだ。それで、キラ・ヤマトってどこかで聞いたことあるなって思って。
でも、全然思い出せなくて。」

と俺が深刻そうに話しているとレクナはくすっと笑いいった。

「それなら僕に聞いてくれればすぐに教えてあげれましたよ。
数日も悩む必要なかったのに。」

俺はレクナをがんみした。レクナはさっきよりも大きく笑う。
「それじゃ、教えてよ」というとレクナはすぐに笑いをやめ微笑みにかえ優しく教えてくれた。

「キラ・ヤマトという方はとっても有名なお方ですよ。
アスラン・ザラと第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦でとても活躍した……」

アスラン・ザラ、第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦……
わかった、思い出した。オーブを救ってくれた、俺にとっては救世主のような人だ。
そんな人を忘れているなんて……
そんなことを考えている俺の目の前ではレクナが長々とキラさんについて語っていた。
このままでは日がくれそうだな……と思い俺はレクナを止めた。

「もういいよ。ものすごくわかったから。」

俺は苦笑いをしてレクナをとめた。
レクナははっとした顔をした後に申し訳なさそうに頭を軽く下げる。
レクナは頭を上げると、これだけは言わせてくださいと俺に言ってきた。
どうぞ、と右手で合図するとレクナは自慢するかのように自信満々で言ってきた。

「ヒジリは知っているかはわかりませんが、カガリ様とキラ様って双子なんですよ。」

「え……？カガリ様とキラさんが双子……？」

その言葉を言った後に俺は少し間をあけ再び声を上げて驚いた。

「えっ！カガリ様とキラさんが双子！？」

「どうしたの？そんなに大きな声出して。」

頭を抑えたまま声の聞こえるほうをむくと、そこにはエリカさんが驚いた顔でたっていた。

俺は口を大きくあけ、エリカさんにレクナが言ったことが本当なのかを確かめた。

「エリカさん。レクナが言ってたんですけど……
カガリ様とキラさんって……その……双子なんですか？」

「ええ。そうよ。」

エリカさんは微笑んで答えてくれた。

俺はレクナの顔をみる。レクナもエリカさんと同じように微笑んでいた。

まるで、俺が知らないだけみたいじゃないか……

俺は考えるために少しだまった。

「カガリ様と、キラさん……」

といいながら頭の中で2人の顔を思い浮かべる。

確かに似ているところもあるような気はする。
双子……か……オーブに住んでいてなんでしらなかったんだろうな……
っというかまって、ちょっと引っかかることがあるな。
俺は引っかかっている点をエリカさんに恐る恐る聞いてみる。

「エリカさん、カガリ様はナチュラルですよね。」

「ええ。そうよ。」

「でも、キラさんはコーディネイターですよね？」

エリカさんはきっと俺の聞きたいことがわかったのだろう。だから微笑みながらこんな返答したんだ。

「まぁ、そんな深く考えなくていいのよ。」

と。
俺はすっごく深く考えるんですけどね、と思いながら俺はレクナの顔をチラッとみた。
レクナは俺がみたことに気付き「エリカさんの言うとおりですよ」と微笑んでみせた。
2人というか、なぜレクナは知っているのだろうか。詳しく調べてしまいたくなるじゃないか……
詳しくしるためにはこれが最初の質問だよねと頭の中で質問の内容をきめエリカさんにまた質問する。

「それじゃ、カガリ様とキラさんどっちが姉、兄なんですか？」

「それはわからないのよ。」

エリカさんは苦笑いをしていった。
本当ですか？と疑ってしまったが疑ってもしょうがないので、

「それじゃ、エリカさんはカガリ様とキラさん、どっちだと思いますか？」

と聞いた。
レクナはエリカさんの後に聞かれるのかなと思ったのだろうか、考える人状態になっている。
エリカさんも少し考えこんだ。しかし、答えは……

「そうね、私はどっちが姉でも兄でもいいと思うわ。」

自分でも想像していたような返答が帰ってきた。
俺は「ははは」と声をだして苦笑いをした。
そして、目の前にいる考える人状態になっているレクナを見る。
レクナはなんて答えるだろうか……

「レクナはどっちだと思う？」

まだ悩んでいたのだろうか、少し間をあけて、

「ヒジリはどっちだと思いますか？」

と質問を質問で返してきた。
俺はどっちだと思ったのだろうか……しばらく考える。
上がだめだと下がしっかりするとかいうけれど、俺が知る限り2人はもの凄くしっかりしていると思う。
俺は悩みに悩んで結論をだした。

「俺はカガリ様がキラさんの姉だと思う！！」

「どうして？」

エリカさんはズバッと俺の心にささりにきた。

「えーと」といったあとに少し考える時間を作った。

「カガリ様のほうがしっかりしているか……ら……？」

自分でさっき言ったことを思いだす。

上がだめだと下がしっかりするって言っても、下がだめだと上がしっかりしているという場合もある。

だからと言ってキラさんをだめと言っているわけではない。

何と説明すればいいのだろうか……雰囲気といえばいいのだろうか……

俺はこの状況を打破するために目の前でまた考える人状態になっているレクナに質問を振った。

「それで、レクナはどっちなの？」

レクナは俺が話をかけても考える人状態のままだ。

う～んう～んといいながら考えている。

「いや……そこまで深く考えなくてもいいよ。」

と俺が言おうとしたとき、レクナは椅子から立ち上がり返答した。

「僕はキラ様がカガリ様の兄だと思います！！」

「なんで？」
俺はエリカさんのようにさっと質問した。
レクナはさすがだ。俺よりも考える時間が少なく返答した。
「エリカさんに教えてもらったことなんですが……
キラ様がカガリ様の頬をたたいたことがあるんですよね。
なぜ叩いたのかは教えてもらわなかったのですが……」
「そういえば、レクナにいったわね。」
俺はそんなことときいてませんよ……初耳です。
「そのことを思い出すといろいろ考えて兄として妹をしかったとしか捕らえることができなかったんですよね。」
とレクナは苦笑いしながら右手で頭をかいた。
でもまぁ、そっちの考えも間違いでないのかもしれないな。
カガリ様やキラさんはどっちが姉、兄なのかしっているのだろうか。
まぁ、そんなことを考えても仕方ないよな。
「どっちも考えられるってことだね。」
と俺はレクナとエリカさんに笑ってみせた。
レクナとエリカさんは微笑み返してくれる。
「それじゃ、私は仕事にもどるわ。二人もＭ１を整備しておくのよ。」
と言ってエリカさんは自分の部屋の方向へ歩いていってしまった。

「それじゃ、俺たちはＭ１の整備にでも行こうか。」

「はい。」

俺たちはＭ１が収容されているドッグに向かって歩き始めた。

俺たちはこんな話をしていたけれど今のオーブの状況は最悪だった。
地球連合と条約を結び、オーブは地球連合軍の手をかりてしまうことになったのだ。
オーブは何をしてんだ、って思ったけど仕方がないのかもしれないと俺は思ってしまった。

そして、ユウナ・ロマ・セイランがカガリ様に結婚しようと言ったそうだ。
俺ははっきり言ってそんなの反対だと思ってる。
理由はないけれど、そう考えてしまう。
きっと未来のオーブがどうなってしまうのか自分でも不安に思っているんだ。

オーブの未来はどうなってしまうのだろうか……

第三話　？　初めての戦場（前書き）

『※この小説について』を読んでから読んでくれると助かります。

第三話　？　初めての戦場

オーブではカガリ様とユウナ・ロマ・セイランの結婚の噂が漂っていた。
しかし、まだ新聞やニュースはその話題を報じてはいない。
だが、俺たちのいる地下施設はその話題で持ちきりだ。
俺は結婚の噂についてもショックを受けているが、
一番ショックだったことは地球連合軍との条約を結んでしまったこと。
オーブは地球軍の手をかりることになってしまったこと。
オーブの理念はいったいどうなってしまったのかと考えてしまう。
俺は地球軍に恨みをもってオーブ軍に入ったというのにこれじゃ復讐なんてできないじゃないか。
いっそのことミネルバに乗り込んでしまおうかとまで考えてしまった。
でもそれじゃ、ここまでやってきたことが全部無駄になってしまう。
せっかく、エリカさんが誘ってくれたのにオーブ軍をやめザフト軍に入ることはできない。
それに、なんだかんだでオーブが好きだしね。

「親同士の婚約者だといっても少しかわいそうな気がしますよね。」

レクナは後ろから話をかけてきた。レクナの声は少し寂しくきこえる。
俺はレクナのほうを向くと想像通りの苦笑いをしていた。

「そうだね。かわりに俺が結婚してあげたいよ。」

と苦笑いをしながら冗談をいってみる。
レクナもさっきの苦笑いのまま「男性の結婚は１８歳からですよ。」
といってきた。
はは、そんなのしってるよ。
少し沈黙が続いた後にレクナが口を開いた。

「本当に、どうなっちゃうんですかね。オーブは……」

「そうだね……」

レクナもかなりショックをうけたのだろう。
表情も声もとても不安そうな感じに捉えてしまう。

「どうしたの？そんな暗い表情しちゃって！！」

横をスーッと通る顔も声も知らない人に俺は背中を思いっきり叩かれた。
背中のジンジンするところをがんばって手で押さえる。

「あ、ごめんごめん。痛かった？」

それはもう痛かったですよ……と思いながら俺は叩いた本人のほうをすこし睨んで向く。
そこには俺と同じくらいの身長の女性の人が立っていた。

「おうおう、そんなに怖い顔しちゃいけないよ。」

女性は左手を腰にあて右手の人差し指をたて左右にふる。
同じ歳ぐらいの人なのだろうか……
と思いつつも俺は少しムカッときたので睨んだままの顔でいってや

った。

「こんなことされちゃ、こんな顔ぐらいしますよ。
そんなんじゃ、モテませんよ。」

「ここは戦争をする場所だよ？
そんな話だすなんておかしいんじゃないの？」

と女性は鼻で笑いながらいった。
ますますイライラするな……もう少し考えてものが言えないのかこの人……
と俺が思っていると

「この人もう少し考えてものが言えないのかなぁ～？」

と俺の思っていたことをそのまま口にだし言ってきた。
ここで引いたら男として恥ずかしいなんてことを思い俺は言い返した。

「それはこっちの台詞ですよ。」

空気が一気に張り詰める。
隣で見ていたレクナは苦笑いをしながら俺たちのやりとりをみていた。
女性はレクナのほうを向いて応援を要請した。

「レクナ君！レクナ君は私が悪いと思わないわよね？
モテないとかいいだしたあっちが悪いと思うわよね？」

レクナと知り合いなのかな？

俺も負けじとレクナに話をかける。

「いや！この人が悪いよね！！いきなり背中叩いたりしてきてさ！！」

レクナは俺と女性の顔を交互に困った顔でみてくる。
そのときだ、俺は後ろから頭をポンと叩かれた。

「いったーい！！」

女性も俺と同じように頭を叩かれた。
俺はそれほど痛くなかったのに何故か女性は声を上げる。
同じ力で叩かれたと思ったんだけどな……
そんなことを思いながら俺は叩いた本人のほうを向く。
そこには微笑んでいるエリカさんが立っていた。
レクナはふーっと息を吐く。安心したのだろう。

「エリカさん、聞いてくださいよ！！
この子、私に暴力振ってきたんですよ！！ひどくないですか！」

いやいや！！暴力振ったのはそっちでしょ！
俺はそう思い、女性を再び睨み始めた。
その後に負けじと言ってやろうと思ったがエリカさんが止めに入った。

「はいはい。さっきから見ているから何があったか知っているわ。」

女性は、ちっとした顔をする。そうして俺を睨みつけた。
エリカさんは話を変えるためＭ１アストレイの話をだしてきた。

「あなたたちのＭ１アストレイを改良させてもらったわ。」

「改良？」

３人の声がハモった。
エリカさんは「そう」といいながらクスッと笑う。

「あなたたちのＭ１アストレイのバックパックを改良して『シュライク』を装備させたわ。」

シュライク、何だそれ？
と思い俺がエリカさんに聞こうとしたがレクナが先に聞いてしまった。

「『シュライク』とは一体何ですか？」

「『シュライク』の詳しい説明は他の人に説明させるわ。
簡単に言えば、シュライクを装備していれば大気圏で戦闘が可能になるのよ。」

エリカさんは俺たちの表情を伺いながら言った。
俺は目を輝かさせた。
飛行での戦闘が可能になる＝自由が俺の頭の中でぽんと出てきた。
自由というのは戦闘の時の動きというべきだろうか。
地上での戦闘では飛行しているＭＳを打つことは大変なのだと演習をしてきて何回もわかってるしね。
そんなことを思いながら喜んでいる俺をまだ女性は睨みつけていた。
その睨みつけはさっきとは少し違っているように俺は感じた。
バカじゃないのという睨みに感じる。

「本当に何もしらないのね。バカじゃないの？」

あ、俺の予想通りだ。

「空を飛んで戦争するってことはものすごく注意をしなければいけないの。

空からの攻撃、そして地上からの攻撃もあるんだから。」

「それは地上で戦っているときも同じだと思いますよ。」

「地上では岩とかがあればそれに隠れてしまえば少しは楽なの。

でも飛行してしまえばどこにも隠れるところが無いのよ。」

「戦争なんだから隠れるなんてことしなくていいんじゃないんですか。

攻めて行けばいいんです。」

「攻めるだけじゃ戦争は勝てないの。

身を守るってことも考えないといけないものなの。」

「飛行なら左右上下前後、どこにでも動くことが可能です。」

「でも、それでも打たれるの。」

「地上は左右と上にしか動くことはできません。」

「だからと言って下に動くことができなくてもよけることは可能よ。」

話がかみ合っているようなないような会話を2人で永遠に言い合っていた。
レクナはため息をつく。
エリカさんは限界が来たのだろう、俺たち2人の言い合いを止めた。
「はいはい、やめなさい。そういうことは成績をだしてからいって。」
「私はいつも成績をきちんと出しているつもりですよ。」
エリカさんは苦笑いをして鼻からふっと息を吐いた。
この女性は戦争の経験が豊富なのかな？
と思いながら俺はエリカさんのほうをちらりと見る。
エリカさんは俺の考えていることがわかったのだろうか。
何も聞かなくても返事をしてくれた。
「彼女は一年前に入ってきた子なの。
彼女は親に進められて軍にはいったのよ。」
「ちょっとエリカさん！！こんな子に教えないでくださいよ！！」
と女性はエリカさんの腕を掴みながら言った。
「これから共に戦っていくのに相手のことを知っていないといけないでしょ。
あなただってそう思うでしょ？」
女性の手はエリカさんの腕から離れていった。
女性はそうだと思ったのだろう。
女性は俺のほうを向き、自己紹介をしてくる。

「これから一緒に戦っていくわけだし、自己紹介しないといけないよね。
私はアリー・アットホ。１７歳よ。よろしくね。」
とさっきの睨んでいた顔とはまったく違った優しそうな笑顔で手を差し出す。
握手を求めているのだろう。
俺は手を伸ばし握手をし微笑みながら、
「俺はヒジリ・フェスタークです。１６歳です。よろしくお願いします。」
と言った。
そして、握手をやめアリーさんは俺とレクナを交互に見てふっと鼻で笑っていった。
「レクナ君とは全然違うな～。レクナ君のほうが大人っぽいよ！！
２人が同じ歳にはみえないな！！」
レクナに向かって親指を立てグットとする。
俺のほうがレクナより子供だっていいたいんだろうな、アリーさんは。
っというか、さっきもレクナ君って言ってたけど……二人は知り合いなのかな？
俺はアリーさんに聞くとなにか面倒なことになりそうだと思いレクナに聞いた。
「２人は知り合いなの？」

レクナは俺のほうを向き微笑んで答えてくれた。
「いえ、ヒジリと出会う前にお会いしたんです。」
ふ～んと俺は鼻で言った。
エリカさんが咳払いをして話をＭ１の話に戻した。
「今からいろいろと説明を聞いてもらうからブリーティング・ルームに集まって。」
そういわれると俺たちはブリーティング・ルームに向かった。
向かっている最中にはエリカさんからＭ１アストレイシュライクの資料をもらった。
その資料には難しい言葉がたくさん書いてある。
俺はレクナに質問をして教えてもらい少し理解した。
まぁ、アリーさんにはバカにされたけどね。
ブリーティング・ルームに到着すると俺たちは決まっている席に着いた。
そしてＭ１アストレイシュライクの操縦者となる人たちが説明を真剣に聞いている。
レクナに教えてもらった難しい言葉意外にも専門用語がたくさんとでてきた。
これは勉強していかないといけないなと思いながらわからない言葉をメモに書きとめておく。
俺たちがＭ１アストレイシュライクの説明を受けているころ、
ミネルバはオーブを出て太平洋で待ちかまえている地球軍と戦闘にはいるところでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1417n/

機動戦士ガンダムSEED DESTINY＋α

2011年10月7日17時58分発行